

## 〈資料紹介〉 久安二年(1146年)銘陶製五輪塔

赤羽 一郎

ここに紹介する陶製五輪塔は個人所蔵のもので、最近筆者が調査する機会をえたものである。残念ながらその出土地や共伴物等は詳かでないが、おそらく経塚造営の際、経筒もしくは経巻を収納するために制作されたものと考えられる。以下、この陶製五輪塔の形状、器面に施された梵字・銘文を紹介しつつ、若干の見解を述べていきたい。

### 1. 形状

この陶製五輪塔〈第1, 2図〉は、空・風・火輪、水輪および地輪の三つの部分にわかれるが、おのおの蓋・身・台座の機能をもった容器でもある。空輪は、宝珠(最大径5.4cm)の形をなし、上端はわずかに突出している。風輪は、浅い皿状の受花(最大径8.0cm)となっている。また、火輪はゆるやかに笠状を呈している(最大径22.8cm)。この火輪の内側には“かえし”(直径13.9cm)が設けられているが、この直径は、下記の水輪上端のそれよりも大きく、本来の機能をはたしていない。これら空輪・風輪・火輪は、一体となって蓋となっており、総高は15.4cmである。

一方、水輪は、胴部中央が外へ丸く張り出した円筒形であり、身の機能をもっている(高さ24.5cm、口径12.6cm、底径12.5cm、最大径18.3cm)。この水輪の上部と下部はおのおの火輪と下記の地輪に覆われるため、外観は球形を呈する。また、地輪は円形の筐となっており(高さ7.6cm、口径14.1cm、底径21.4cm、最大径22.2cm)、台座として水輪下部を挿し込んで安定がはかられている。

以上の空・風・火輪、水輪、地輪を重ね合わせると、総高は38.9cmとなり、五輪塔の形状をみせる。

この陶製五輪塔の各部分の基本的な成形技法は「粘土紐巻きあげロクロ成形」であるが、空・風・火輪では、鉢形に成形されたものを反転させて火輪とし、その上部に風輪、空輪を積み重ねている。このうち、火輪の先端周縁部分は指ナデ調整されているが、その断面の形状が同時期の常滑窯や渥美窯の壺口縁のそれに酷似していて興味深い。また、水輪は下部、胴部中央、および上部の順に接合されているが、筒状を呈する下部と上部の内側面は、ヘラ削り調整がなされている。

なお、この陶製五輪塔の器面は灰褐色(外面)または灰青色(内面)を呈し、火輪表面や地輪上面などには黄褐色の自然釉が薄くかかっており、焼成も概して良好である。また、断面は灰白色ないし灰青色の緻密な胎土をみせている。これらの特徴は総じて渥美窯製品に近似しているが、胎土は上に比して若干粘土質に富んでいるようにみられる。

ところで、この資料のように形状が五輪塔になり、水輪が容器としての機能をもっているものとしては金属製が多く知られているが、陶製のものも若干知られている。これら容器としての水輪をもつ五輪塔は、元来ストゥーバを起源とし、舍利容器である舍利瓶を経て、わが国において創製されたといわれている。また、その収納品も、舍利、舎利の代用品(靱や牛玉)、さらには



第1図 久安二年銘陶製五輪塔

法舍利、すなわち法典（経巻）へと変遷していくという。<sup>(注2)</sup>この五輪塔の初源については諸説があるが、一般的に承認されている平安時代末期（12世紀）とすると、この陶製五輪塔は、後述する銘文からも、かなり古い段階のものであり、鎌倉時代以降にみられる墓標や納骨器といった機能とは異なった、本来的な法舍利（経巻）容器としての機能をおびていると考えられる。

## 2. 梵字と銘文

この陶製五輪塔のいたる箇所に梵字や銘文が彫りこまれており、これらによって五輪塔制作の思想や経緯などがうかがわれて興味深い。

### ① 空輪

宝珠形の空輪の側面四方に、𑖕 (Kham、キャン) がヘラで細く彫りこまれている。

### ② 風輪

受花の下面四方に、𑖕 (ham、カン) がやはりヘラで細く彫りこまれている。

### ③ 火輪

梵字と銘文が、笠状の火輪の外面に右廻りで交互に配置されている。梵字は 𑖕 (ram、ラン) で、線刻された一重の円の中央に押型彫りされている。銘文は、妙法蓮華経・卷第二譬喻品第三の一節が採用されている。

悉 是 吾 子	中 略	其 中 衆 生	略	皆 是 我 有	略	今 此 三 界	𑖕
------------------	--------	------------------	---	------------------	---	------------------	---

### ④ 水輪外面中央部

水輪胴部の丸張り出した部分に、梵字と銘文が右廻りで交互に配置されている。梵字は 𑖕 (vam、バン) で、線刻された蓮華座の上に太く浅く丸彫りされている。また、銘文は、妙法蓮華経・卷三化城喻品第七の一節が採用されているが、これは各地の経塚願文や板碑によくみられるものである。

皆 共 成 佛 道	略	我 等 與 衆 生	略	普 及 於 一 切	略	願 以 此 功 德	𑖕
-----------------------	---	-----------------------	---	-----------------------	---	-----------------------	---

### ⑤ 地輪外側面（第5図）

台座となる地輪の外側面にも、梵字と銘文が右廻りで交互に配置されている。ただし、梵字は、あらゆる仏をあらわ

一 切 三 出 佛	𑖕	即 為 以 供 養	𑖕	乃 至 発 一 言	𑖕	聞 法 歡 喜 散	𑖕	自 然 成 佛 道	𑖕	衆 生 如 教 行	𑖕	是 大 摩 訶 衍	𑖕	妙 法 蓮 華 經	𑖕
-----------------------	---	-----------------------	---	-----------------------	---	-----------------------	---	-----------------------	---	-----------------------	---	-----------------------	---	-----------------------	---

す「通種子」である 𑖕 (a、ア) と、四天王をあらわす 𑖕 (dhr、ヂリ：持国天)、𑖕 (vi、ビ：増長天)、𑖕 (vi、ビ、広目天)、および 𑖕 (vai、バイ：多聞天) の5種子からなっており、配列は上記のとおりで、丸彫りされている。また、銘文は、8行からなり、前半4行の出拠は不明であるが、後半4行は妙法蓮華経・卷第一方便品第二から採用されている。なお、5行目の「散」は、経文では「讚」である。

以上がこの陶製五輪塔の、いわば人の目に触れる部分の梵字と銘文である。このうち、梵字について空・風・火・水・地輪の順にみると、𑖕・𑖕・𑖕・𑖕・𑖕となり、「大日如来法身真言」が表現されている。周知のように、末法思想の流布により人々は善根功徳を積むことによって成仏することを希求したのであるが、この積善の具体化が造塔・造仏・写経であった。五輪塔に大日如来法身真言を彫りこむことは、この塔を大日如来とすることでもあるから、写経とともにこの五輪塔制作の一連の行動は、造塔・造仏・写経という善根功徳そのものであったのである。

⑥ 水輪外面下部（第6図）

この部分は、  
台座となる地輪  
に挿し込まれる  
が、右の銘文が

勸 進 比 丘 良 忠	造 之 清 原 重 安	申 時 造 了	七 月 廿 八 日	久 安 二 年	清 原 重 房	藤 原 延 里	大 中 臣 氏	同 四 郎 子	坂 合 部 助 忠	結 縁 衆	慈 尊 出 世	導 師 弥 勒	期 當 來	以 此 功 德 力
----------------------------	----------------------------	------------------	-----------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	-----------------------	-------------	------------------	------------------	-------------	-----------------------

へうで彫りこまれている。この銘文によれば、陶製五輪塔は良忠という僧が勸進、坂合部助忠らが結縁衆となり、清原重安が久安二年（1146）に制作したことがわかる。ここに彫りこまれている人物名は管見の及ぶ限りの文書、金石文には見当たらない。わずかに、坂合部氏が代々伊勢神宮檢非違使の、また大中臣氏が同神宮神官の家柄であったことが判明しているのみである。

⑦ 水輪内底面（第8図）

筒状の水輪内底面にも、右記の銘文が彫りこまれている。

ここで、良忠が勸進僧であり願主でもあったことがわかる。経塚造営、あるいは写経等に当たっては、勸進僧の指導の下に願主（施主）が発願し、それに賛同する結縁衆が集まって実行される例が多い。この陶製五輪塔の例のように、勸進僧が願主を兼ねていることは、良忠が坂合部氏ら結縁衆と近い

願 主 沙 門 良 忠	造 立 土 塔 一 窟
----------------------------	----------------------------

間柄にあったことを想像させる。これらの銘文は、水輪を完成させた後に彫りこむことは困難であり、底部となる粘土板に施されたものと思われる。

⑧ 地輪内側面（第7図）

地輪の内側々面にも、銘文が水平に縦書状にへうで彫りこまれている。これらは切目なく内側面を一巡している。

ここで「五輪土塔」という表現がなされている。同様な例として、極楽寺経塚（兵庫県）の瓦経願文に「大日如来三昧耶形五輪窠觀婆一基」と記されている陶製五輪塔があり、その水輪は舍利容器になっている。また、その五輪の正面には、当例と同様に、大日如来法身真言がへうで彫りこまれている。

為 後 世 菩 提	為 滅 罪 生 善	為 慈 尊 出 世	五 輪 土 塔	遠 海 新 所 之 立 焼	久 安 二 年 七 月 廿 七 日
-----------------------	-----------------------	-----------------------	------------------	---------------------------------	---

さて、この地輪の制作日は、上記の水輪のその前日である久安二年七月廿七日となっており、この陶製五輪塔が少なくとも二日ばかりで制作されたことがわかる。

さらに、注目すべき一節として「遠海新所之立焼」がある。「立焼」については、用語例もなく意味不明であるが、“窯を立てる”“焼き立て”あるいは“一立”（窯2基のこと）といった言葉使いが残存していることから、陶器生産もしくは生産物をあらわすものかもしれない。また、「遠海新所」については、この陶製五輪塔の生産地と考えて差支えなく、今日の地名および考古学上の知見によって、静岡県湖西市新所と断ずることができよう。すなわち、「遠海新所之立焼」は、湖西古窯群のうちに求めることができるものと考えられる。

⑨ 地輪内底面（第4図）

へうで荒くならされた地輪の内底面には、線彫りの蓮華座の上に 𑖀 (ah、アー) が同じく線彫りされている。この梵字は胎藏界大日如来の種子であるが、上記の水輪胴部の梵字 𑖀 (金剛界大日如来の種子でもある) に対応するもので、両者によって金胎不二が表現されている。

3. 「新所之立焼」と湖西窯

浜名湖西岸（湖西市）の丘陵には、須恵器窯及び中世山茶碗窯が群在しており、湖西窯と総称されている。このうち、新所と呼ばれている地域、すなわち浜名湖に流れこむ太田川と笠子川に挟まれた東西の帯状の丘陵では、大森、新古、小俣の三つの山茶碗窯群が確認されている。小俣窯群は6基が知られていたが現在では全て滅失しており、採集資料から12世紀前半から中頃に操業年代が考えられている。また大森窯群は2基が確認されており、13世紀後半から末葉に操業年代が比定されている。他方、新古窯群は近年の発掘調査によって16基が検出されているが、総数は20基を超えるものと推測されている。<sup>(注7)</sup>

この新古窯群では、大半が分焰柱をもたず燃焼室と焼成室の境界に“かけあがり”段差を設けた窯体構造をみせているが、1基のみ（Ⅹ窯）が分焰柱を備えている。このⅩ窯の最終営窯時と推定されている遺物としては、山茶碗・小皿、輪花碗、子持器台、片口小碗、提子、片口鉢、大壺がみられる。この器種構成は、渥美窯の加治坪沢第2号窯に酷似しているが、小皿が碗形を維持しているものの全て高台を失っている点から、加治坪沢第2号窯とは操業年代を異にし、12世紀第4四半期に操業年代が比定されている伊良湖東大寺瓦窯群に並行するものと考えられる。このように新古Ⅹ窯の操業年代を12世紀第4四半期とし、また小俣窯群のそれが12世紀前半から中葉にかけてのものであることを首肯すれば、いま着目している新所地区において、12世紀前半以降連続して陶器生産が営まれていたというであろう。<sup>(注8)</sup>

ところで、この新所地区は国衙領であった可能性が指摘されており、この地区の陶器生産及び流通が国衙機構によって掌握されていたことが想定される。<sup>(注11)</sup>この陶製五輪塔には、坂合部氏や大中臣氏という伊勢神宮関係者の名が彫りこまれているが、彼らがこの陶製五輪塔の需給に直接的にはかかわっていたとはいいがたく、むしろ勸進僧兼願主の良忠や、制作者である清原重安が国衙機構のいずこかに属していたことが考えられる。この点は渥美窯についてもいいうことで、伊勢神宮の御園あるいは御厨において独自の流通ルートを確認した自主的な陶器生産は、12世紀後半、就中、第4四半期に本格化するものであって、それまでは、国衙の介在を第一義的に考えなければならぬ状況にあったと思われる。

本稿の執筆にあたっては、足立順司、小野田勝一、木太久守ならびに後藤建一の各氏に貴重な御助言をいただいた。記して謝意をあらわしたい。

注1. 極楽寺経塚（兵庫県神崎郡香寺町）の土製五輪塔は、伴出の瓦経から康治元年（1142）もしくは天養元年（1144）と知られている。ここに紹介した陶製五輪塔とは構造を異にするが、形態的には空・風輪に共通点がみうけられる（奈良国立博物館『経塚遺宝』東京美術、1977）。また皿焼古窯群（渥美郡渥美町）から陶製五輪塔の水輪を除く各部位が発見されている。その正面と裏面には、大日如来法身真言が各々丸彫り、線彫りされている。伴出の山茶碗・小皿の特徴から12世紀第3～4四半期にかけてのもので推定される（渥美町教育委員会『皿焼古窯址群調査概報』1984、ほか）。

なお、白岩西遺跡からは、徳治（1306～1308）銘の陶製五輪塔が発見されている（北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『白岩西遺跡』1985）。

注2. 石田茂作「日本佛塔の研究」（『佛教考古学論攷四』思文閣出版、1977、所収）

注3. 前掲注1

注4. 滝田貞一『常滑陶器誌』常滑町青年会、1912

注5. 湖西市教育委員会後藤建一氏から、この陶製五輪塔の胎土、焼成状況からみて、湖西窯のものともみてよいたの御助言をえた。

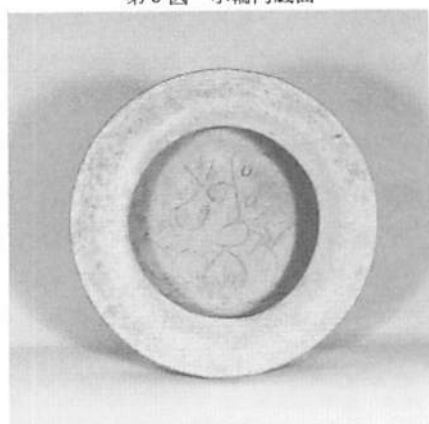
- 注6. 同様の例としては、銀荘水晶六角五輪塔（四天王寺蔵）がある。
- 注7. 足立順司「中世陶器生産と消費・序説」（『東笠子（HK）第27地点遺跡発掘調査報告書』湖西市教育委員会、1982、所収）
- 注8. 『青平古窯跡・新古古窯跡発掘調査報告書』湖西市教育委員会、1984
- 注9. 『渥美半島における古代・中世の窯業遺跡』田原町教育委員会、1971
- 注10. 『渥美半島埋蔵文化財調査報告』愛知県教育委員会 1967
- 注11. 前掲注7.



第2図 陶製五輪塔実測図(1/3)



第3図 水輪内底面



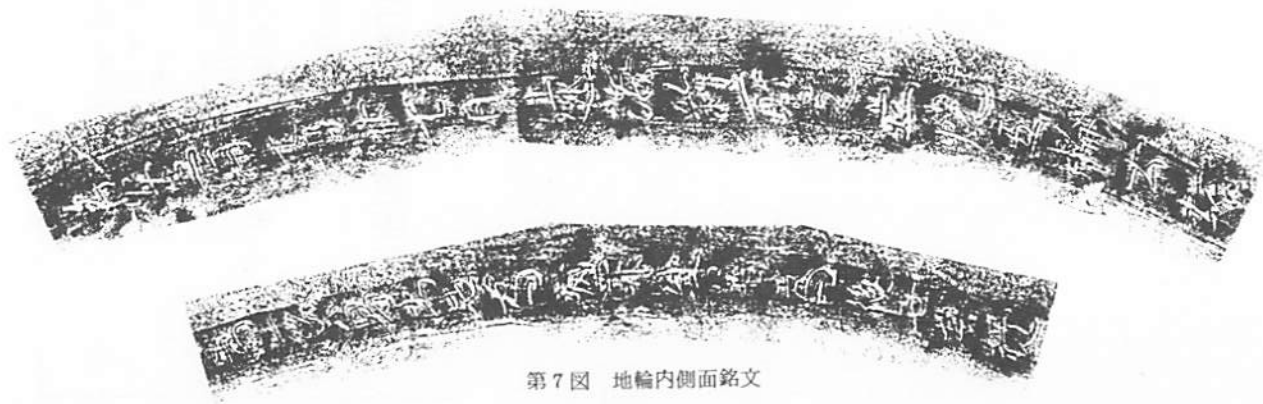
第4図 地輪内底面



第5図 地輪外側面



第6圖 水輪下胴部銘文



第7圖 地輪內側面銘文

0 5cm